

シニアライフ

● 誰でも乗れるヨットの普及に努める



体験会の参加者と一緒にアクセスディンギーに乗る畑辰幸さん＝津市で



九月の太陽が照りつける伊勢湾の港内。色とりどりの帆の小さなヨットに、車いすを降りた人や小さな子どもたちが乗り込んでいく。
津市のマリーナ河芸で、小型ヨット「アクセスディンギー」の体験会が開かれていた。脳性まひの女性(三)を乗せ、畑辰幸さん(五)＝三重県伊勢市＝がかじを取る。手を伸ばせば触れる水面で、魚が跳ねる。ヨットから下り

風操る楽しさ皆に

た女性は「気持ち良かった」とほほ笑む。
アクセスディンギーは操作がしやすく、セントアボードという長くて重い板を水中に下ろすなどして転覆の心配がないよう設計されているため、障害者や子ども、高齢者も楽しめる。オーストラリアで生まれ、現在は十五カ国以上に広がり、日本でも約二十カ所の拠点がある。特に三重県は盛んで津、伊勢両市内に三カ所。その普及団体「セイラビリティ伊勢」の一員だ。
三重県南伊勢町の漁師の家に生まれ、子どものころから父と夜にイカ釣りに行き、潜

ってはサザエやアワビを採るなど、「海で育った」と振り返る。国立鳥羽商船高専に通って航海士に。海運会社に入り、船長として中東、アフリカからタンカーで原油を運んだ。
五十代初めにアキレスけんを切るけがをして、松葉づえに頼る生活を経験。障害がある人の大変さを実感した。当時は一カ月半～三カ月間航海し、日本に数日停泊して家族と面会、また海に戻る生活。「地元につながりがなかったので、地域の人々と付き合いたい」とも思い、セイラビリティ伊勢を訪ねた。

長さ二百以上のタンカーに乗っていたため、初めてアクセスディンギーを見た印象は「たらいみたいな船で大丈夫か」。「船乗りです」と自己紹介すると、いきなり「乗せられてレースをした。思ったよりもスピードが出て、車いすの人の歯が立たなかった。」「船長として航海士は操舵室にいる。海峡を通る時に指揮する以外、パソコンが書類作業ばかり。もっと海をじかに感じたかった」。五歳で早期退職し、本格的な活動に参加した。

仲間には車いすを使う障害者も多い。「最初は手助けしなければと思ってたが、レースすると負ける。目が見えない人は、より風向きに敏感。今、手伝って、と言われるまでには出さない。ボランティアやなく、楽しいからやってる」



セイラビリティ伊勢は二〇二年、マリーナの持ち主強力修代表(三)や高校のヨト部の顧問の教師らが「ヨト離れが進む中、誰でも乗るアクセスディンギーで、リンスポーツの魅力を知ってほしい」と始めた。

二十六、二十七両日には勢神宮の式年遷宮を記念し伊勢市で東海地方初の全国会を開く。畑さんは「障害者ある人となない人が、本気で負っている所をぜひ見てほしい」と力を込めた。

(吉田瑠里)